

ワンモアタイム

有森 信二



部屋に差し込む光の眩しさに目覚め、底冷えのなか、布団から上体を起こした。胸を掻き合わせながら、枕元の時計を覗き込む。七時だ。

頭の芯が、キンと奇妙に冴え返っている。

いつもと、何かが違う――。

布団を出て、雨戸に近づき、その眩しさの元に寄った。

雨戸がわずかに開いている。二センチほど開いた狭い隙間から一筋の鈍い光が差し込み、部屋を淡く照らしている。

ちゃんと閉めた筈なのに――。

戸締りにはいつも神経を使い、何度も確かめるのだが、小さな隙間ができていた。そういえば、昨晩はゴミを片付けるときに急いで締めたのだったが、後でもう一度確かめたという記憶がない。

私は、にわかに胸に兆し始めた薄墨色のものを無理矢理押し返し、「たまには、うっかりすることもあるだろうさ」と声に出し、自分に勝手におとしまえをつけてやった。

「それにしても、今朝はえらく冷えるな」

洗面所に立ち、この頃ひどく目立つようになった鬢の白髪を指で引っ張り、寝ぐせのあとを撫でおろした。

――二月二十八日の火曜日の朝は、このように始まった。

十一時をまわった頃だった。まだ早朝の鈍い光の余韻が去らない部屋に、妙にくぐもった音色の電話が鳴った。

「純君が本社していないんです。チーフの純君が、定時に現

れないことは初めてなので、福岡のご家族の方で何か事情をご存知ではないかと思ひまして」

東京の日報システムの香山と名乗った。純から聞いていた直属課長のようだ。

「仕事上のトラブルでもありましたか」

と反射的に尋ねる。

「トラブルなどありません。先週末、ようやく今年の決算作業を終えたので、二日間の休暇を取ってもらったのです。休み明けの今日から出勤するようになっていたのですが、連絡なしに出社しない彼ではないので、私の方から彼の携帯に電話を入れるのですが、応答がなくて」

ちようど、出先を廻る用件があり、早く済んだので、ついでに純のアパートを覗いてみようと思つたのだそうだ。

「部屋のノックはしたのです。が、鍵を開けてもらうには、ご家族から頼んでいただく必要があるのだそうです」

アパートの一階の大家に訊ねたら、決まりだからということとで、入室を拒まれたと言う。

私の方は、上司がどうしてアパートを覗いてみる気になったのか、ということの方を知りたいのだが、香山氏の言葉に妙な切迫感があり、私もふいに得体のしれない胸騒ぎを覚えただした。

示された番号に電話すると、大家からは「何人もから問い合わせがあります。となると、これは警察の方ですね、後刻詳細を連絡します」、という意味不明の答えが返ってきた。

話を繋げてみると、とんでもない事態であるのかもしれない。足が竦んできた。「すぐに東京に飛ばねばならなくなるぞ」と居間の妻に言った。耳をそばだてていたらしい妻も、ただごとではないと顔色が変わつた。

ひよつとしたら、と九年前のことが蘇つた。幼い頃の純は、季節の変わり目には、繊細な子に特有の自家中毒をよく起こし、点滴で凌ぐことが度々あつたが、高校、大学時代は卓球部に所属し、大会ではそれなりの活躍をしていた。文系のサークルも自ら新たに作るなど、以前のひ弱さは微塵もみせず、自家中毒の時期は去つたのだと思わせていた。

ところが、二つ目のコンサルタント会社に就職した年の夏の朝、妻の携帯に「やつぱり駄目。終わりだよ」というメールが入り、電話をしても応答がないため、「とにかく行つてくる」と妻は身支度もそこそこに東京に飛んだのだった。

アパートに着いてみれば、吐瀉物にまみれ、純はものも言えない状態で布団に転がっていたのだった。救急車を呼んで、近くの大学附属病院に運んだときは、脱水症状が悪化して、もう少しで手遅れになるところだったという。妻は、三か月の間、純の身の周りの世話をし、「手当が早かつたからか、次の日には冗談が出てくるのよ。ちつとも、大人になつていないのね」と、傍に付くという口実が得られたことで満足したのか、念願だつた東京生活を満喫して帰つてきた。

だから、すぐに考えたのは、あの自家中毒の場面だった。就職となると、純の神経には重く堪えることのように、会社を転々とし、今の日情報システムが四つ目の職場になる。

公認会計士試験を目指して、三年を棒にふった。「模試では、合格可能と出るんだけど、本番で小さなミスをしてしまふ」と、本人はまだまだチャレンジするつもりだったのが、「(受験)崩れになったらいけないな」という先輩からの助言を得て、「資格取得&専門職」という道を断念し、会社勤務も公務員の道も望んでいなかったのだが、やむなく三年遅れで組織内の生活の方に向きを替え、ようやく慣れ始めたところだった。

もちろん、日情報システムの職場にも「合わないんだよねえ、仕事」と、何度妻の携帯に泣きやばやきを入れてきたことかしかない。

その前の三つの会社をみると、最初の外資の場合は、会計士試験受験を断念したという直後の口惜しさが残っていたのか、「毎日が同じことの繰り返しなのさ。これじゃ、向上心の欠片も生まれない」と言い募り、一年で自分から退職してしまった。

二番目のコンサルタント会社となると、「二十時間労働が当たり前前なんだ。労働基準法など完全無視。ブラック過ぎるよ。仕事はというと、抽象的な課題に沿って、プランニングをしなければならぬ。最初から、正當な答えなどないと判っているんだ。無茶だよ」と、妻の寝る間がないほどに、毎晩十

二時を過ぎてからの電話が頻繁に掛かってきた。

妻は、「石の上にも三年と言うのよ」などと懸命に宥めていたが、コンサルタント会社の方は妻が駆け付けたように、一年足らずで救急入院となり、辞めざるを得なくなつた。

私たちは、「虚弱だったから、やはり甘やかし過ぎたのかしらねえ」と繰り返し返すばかりで、「こうなつたら、本人が好むシエフの道にでも進まざるを得ないのかな」などと話していると、間を置かず、著名な外資の食品会社に内定を得たという連絡が入つた。

それは、三度目の就職を斡旋した担当者も驚くほどの転身の内容であり、しかもコンサルタント会社を辞職し、入院の状態がかるうじて癒え、三か月付き添っていた妻が帰って、一週間と経っていないのだった。

「驚きましたよ。こんな展開をみたケースは、私の経験にはないことです。今度こそは、是非この会社に腰を据え、頑張ってください」

斡旋担当者が特別のコメントをくれるほど、純が面接で相手の琴線にアタックしたそれは、画期的なことだったらしい。

純も、「得意な語学力を生かすことが出来る」、「仕事の時間は、当人の能率次第で決まる」、「人間関係が湿っぽくない」、「全体が明るい」などと、希望する点がかなり叶えられるということで、内定を得たことを芯から喜んでいった。

ちようど、私たちが信州方面への旅行を計画していたつい

で、だったから、帰りに新しい職場を見せてもらうことにした。会社は新宿区の高層ビルの中核となるモダンな社屋で、さすがに広く名の知られた外資企業だけあって、辺りを一際明るく照らしていた。

昼休みに抜け出してきた純は、背中に社屋を背負う格好で庭のベンチに腰掛け、「フィーリングがピツタリだよ。社員は年齢を問わず、きびきび働いているよ」と満足げだった。私も妻も、資格取得コースから方向を転じ、組織の中に入ると決心してから、初めて見せる屈託のない表情だとようやく安堵したのだった。

しかし、その会社をほんの一月で職になったのである。会社には通常用いる会計のITシステムはないのですか、と上司に尋ねたことが相手の機嫌を損ねたらしい。他にも理由はあったのかもしれないが、純には別に思い当たることはないという。

純の梢げようといったら、なかった。自分の全てが否定され、未来はないと告げられたというに等しいものだった。

「普通に働いてたんだよ。オフィスの雰囲気もグー。上司も五月蠅いことは言わないし、女の子たちとお喋りも楽しかった」

「ただね、帳簿の方は手書きだし、パソコンはたくさんあるのに、システムがないんだ。ついね、前の会社のシステムのことを口に出しただけ。それって、アウトなことなのか。いきなり、明日からこなくていい、だ」と

純は、妻に二時間も三時間も電話をし、聞く方の妻も言葉に窮し、「また、あの自家中毒をやらかすのではないかしら」と、本気で心配していた。

四つ目の日情報システムに勤めて、八年近くになる。九年前の自家中毒以来、寝込むことはなかった。三つ目の外資企業を一月で職になったときも、「ぼくもここでへこたれている訳にはいかない。意地だよ」と前を向き、今度もまた、就職斡旋会社の前の担当者からの紹介で、三週間と置かず内定に漕ぎつけたという。

「ぼくもね、三回の失敗で学んだよ。いつまでも、会計士を追いかけていたときみたいな逃げのスタイルが、他の人にははつきり見えていたんだろう。とにかく、背伸びをせず、まづ三か月を辛抱し、三年をめざし頑張ってみるよ」

とは言ったものの、中途採用であり、本人に企業世界で生きる必要で具体的な準備がなかったためか、一つ一つの場面で躓き、ミスをし、叱責されながら、会計現場の経験を積み上げた。それが、五年が過ぎたあたりで、ようやく上司からも、守備範囲の仕事の全体が見えるようになったと評されてきたらしい。

三年前に主任になり、最近では重役や社長とも頻りに顔を合わせる予算、決算の仕事を担当するようになっていた。

妻も、日情報システムの間関係や、些末な事柄の一部始終を聞き、覚えてしまうほどに、細かな相談を受け、一つ一

つの場合で励ましてきていた。

であるから、私たちがまず思い当たったのは、「自家中毒で動けないのだ」という姿だった。妻は、上司の香山氏からの最初の電話が入ったとき、「すぐに行かなくては」と手荷物を探った。そして、純に電話を入れた。応答がないので、メールもした。「純君、どうかしたの。一言でいいから、何か知らせてください」というものだった。

私は、香山氏に、「大家との連絡はつけたので、判ったことがあつたらすぐに教えてほしい」と連絡を入れた。

香山氏からは、折返し「私は中に入れてもらえないのだそうです。後で連絡があるまで、自宅に待機していただくということです」との返事を得た。「何のことなのかも判らないのですか」と尋ねたのだが、香山氏は無言のまま電話を切った。

異常な空気を察した私は、東京行きは免れないだろうと、すぐに五日分ほどの荷物作りにかかった。妻も、同じだった。「あの子、吐瀉物にまみれているのじゃないかしら。至急、救急車の手配をしなくては」

気が気ではないらしい。一刻も早く家を出ないと言い張るのを、とにかく連絡がくるまで待てとのことだ、と懸命に押し止めた。

思えば奇妙な数日だった。私が福岡の小説道場という集まりに出席していた二十五日の土曜日の昼、入院中である九十歳の私の母から携帯に電話が入った。妻を電話口に出せという頭ごなしの口調だったが、今外出中の場所にいるので妻は傍にいないと言うと、プツリと切れた。いったい何の用だったのか、と怪訝に思つたものだった。小説道場は、退けると決まつて一次会、二次会に繰り出すのだったが、電話での蟻りが残つていたため、二次会に誘われるのを振り切り、一次会が終わると仲間と別れたのだった。

翌二十六日の日曜日は、朝早くに目覚め、母の怒りを帯びていた言葉を反芻していた。私の末弟の携帯を借りての電話だったので、問合せのしようもない。ちなみに、末弟に「用向きは何だったのだろう」と尋ねてみたが、特に変わったことではなからうという返事だった。

普段だと、積み上げた本を取り出して読んだり、書き掛けの原稿に手を加えたりするのだが、気持の何かが抜けており、バランスが整わず、落ち着かないままだった。

畳に大の字に寝転んだ。そのうちに、頭の奥に、空へ空へと上つていくときの感覚が現れ、体は部屋の天井を抜け、どんどん飛んで行き始めた。眼下には見慣れた屋根が見え、やがて広い街並が広がり、たちまちのうちにそれらは雲の下になった。それでも体は上昇を止めない。足の下には水を湛えた大きな海があり、近くには険しい峰々もある。

私が十八歳時に受けた手術中に、体外離脱を経験したとき

の情景に似ている。得体のしれない力に引かれ、心は体を離れ、やけに軽い。

十八歳のときは、途中で体の激しい痛みが戻ってきて、病室の中で我に返つたのだつた。

嫌な記憶だな、と思い出したくもない胸苦しい情景を、懸命に振り払い、遮つた。

妻も同様だつたようで、日曜日は趣味の歴史を語る会に出たのだが、みんなの話が頭に入らず、支離滅裂な受け答えばかりをしたと、浮かない顔だつた。

じりじりと待たされる時間の長さに閉口しながら、「今頃、自分で病院に駆け込み、点滴を受けている頃かしら」

などと妻が口にするが、「いえ、あの子、短い休暇を利用して近くの国にでも出掛けているのよ。それが、航空機の便に狂いが出て、帰国途上なのかもしれない」とも言う。

しかし、どれもがしつくりこない。では、何なのだ、と問い掛けてみるが、戸外を吹き抜ける木枯らしの音に消されてしまう。

「いつまで待たせるつもりなんだ」

と暮れかかる空の色を眺め、一向に進まない腕の時計を苛立ちまぎれに振つた。

十六時半をやや過ぎた頃、牛込署刑事課というところから電話が入った。

「純君の死亡を確認しました。至急署までご足労願います」私の耳が、ジンと鳴つた。いつたい、何なのだ。いきなり死亡、とは。「それは——」と言い掛けたが、次の言葉が出てこない。

「事件性はありません」担当だという刑事の言葉は落ち着いている。持病はありませんでしたかと聞くので、思い当たらないと答える。

「自室で就寝中の、心臓の発作による突然死だと、監察医から報告を受けています。ともかく、何時になつても構いませんから、署まできていただけませんか」と言う。私たちの福岡の住所を承知した上でだろう、「夜間の一時でも、二時でも署は開いています。署では誰にでも構いませんので、私の名前を告げてください」と、刑事は言い添えた。

私たちは、「もしかして」と心の底で思っていたことが実際に起きたということ、ものを言い交わすでもなく、急いで荷物をまとめ、車を呼んだ。車を待つ間、末弟に、純の死を知らせた。

妻は口を閉ざしている。あまりのことに、大丈夫かと声を掛けると、「判つてる。キャンセル待ちの便が、都合良くあるかしら」と意外に落ち着いた口調で答える。

思えば、妻と純は姉弟のような仲で、つい一か月前、純の住む神楽坂の店で、楽しく食事をしたと言っていた。「純はね、最近人間が出来てきたというか、見違えるように明るく

なつてね、仕事のことも殆ど一人でこなせるようになったと言うの。この調子でいくと、間近には課長待遇になり、収入も倍増する筈だつて。その秘訣は、いつも笑顔でいることだよ、と教えてくれたわ」

何度が聞かされたことを、静かな口調で繰り返す。やはり、信じられないのだろう。普段だと、感情が表に出る質なのに、シヨックで気持が立ち上がらないのかもしれない。

妻は、純の住む神楽坂までの行程を諳んじている。気持の沈むときや、純の電話のトーンが上がらないときなど、何度も神楽坂に向いている。日本橋で、東西線に乗り換えるとすぐなのよ、というのが口癖だつた。

そう言っていたのだが、牛込署の刑事の話では大江戸線に乗り換えて、ということだったかと勘違いし、深夜でもあり、結局牛込署に向かう道が判らなくなり、飯田橋でタクシーを拾い、ようやく辿り着いた。午前零時の十分ぐらい前だったか。

署の二階に案内されると、待ち構えていたとみえる刑事が来客室に導いてくれた。刑事という肩書きから、敵めしい人物を予想していたのだが、柔和な笑みを湛えている。

「突然の悲しい連絡で、気を落とされたでしょう。電話でも伝えましたが、事件性はありません。部屋に入ると、布団に上向きの姿勢で寝ていました。苦しんだ様子はありません」

「お世話をお掛けしました。でも、いったいどういうことなのでしょう」

「持病はお持ちではないのでしたね」

「繊細な子でしたから、幼い頃、自家中毒というのは何度か」

「処方された薬の中に、抗生剤が多くあつたので、参考にはしました。鑑識では、心臓性突然死と見立てています」

話を聞いていた妻が、感極まつたのか「すぐに、純に、純に会いたいのですが」と声をあげた。

「失礼しました。今すぐにご案内します。とても、優秀なお子さんだつたようですね」

刑事の後に従い、エレベーターに乗った。地下のどこかに降りるらしい。到着すると、入口で年若い女性警官が敬礼をして出迎えた。連絡がなされていたのだろう、一台のストレッチャーが、手前に引き出されてきていた。女性警官が顔のガーゼを除いてくれた。

純がいる。眠っている。普通に眠っている。穏やかに眠っているではないか。

「純、どうしたの、どうしたつていうの。起きてちょうだい。起きるのよ、目を覚ますのよ。いったい、何をしてるのここぞ。まあ、なんて冷たい。なんなの」

妻の悲鳴と嗚咽が安置室に響いた。私も純の頬を撫でてみた。冷たい。凍り付きそうに冷たい。

「いったい」

「ええ、今日が三日目になります。冷たいのは、ドライアイスのせいです。実は、発見時の今日の昼には救急車も呼んだ

のですが、蘇生は当初から無理だということで、救急病院に運ぶことはしませんでした。こんな、気持ちよく眠っているという表情のまま、三日になるのです」

三日目になるということは、朝早くに目覚め、妻も趣味の会でみんなの声が耳に入らなかつたと言っていた二十六日の日曜日だ。その早朝のあどときに息を引き取つたのだつたらうか、という呵責の思いが攻め寄せてくる。

刑事は私たちの様子を見やりながら、「もう一度二階をお願いできますか」と誘い、女性警官の敬礼に送られ、安置室を出た。

「お子様の残念な姿に直面していただきましたが、当管内でも、本当に前途あると思える若者の突然の死が、最近多いのですよ。私も、これは何なのだろうと訝っています」

残りの概要を説明し、「明日は決まりに従い解剖が行われ、その後ご遺族にお引き渡す、ということになります」ということで私たちとの対面の用を終えたのか、「署の方でお世話する葬祭業者でよろしければ、呼びますが」という言葉が終わらないうちに、若い青年が現れた。

糸田と名乗った青年は丁寧に弔意を述べ、「お任せいただけますか」と言う。嫌も何もない。彼の勤める小型のバンに乗り、方向の判らない東京の街を十分ほど走ってホテルに到着した。そのまま彼がフロントに事情を説明し、四泊の手続きをしてくれた。

眠れる訳もない。と思いつつ二時間ほど微睡んで起きると、糸田氏はもう部屋のドアのところまで待つていた。「今日は大塚というところで解剖です。半日待機し、夕方は安置所に移ります。明日は神楽坂のアパートへも行つていただきます」との説明である。

彼は三十一歳だという。昨晩来、些末なことを聞いても、知りたいことのその先までを丁寧に説明してくれる。純より七歳下であるのに、どうしてこうも相手の思いが解るのだろうと言うのをやめ、「この仕事に就いたのには理由があるのですか」と、つい失礼なことを聞いた。彼は、「母を幼いときに亡くし、こうしていると、いつか会えるかもしれないと思つていのです」と笑顔の顔を赤らめながら答えてくれた。大塚での解剖を終えると、高田馬場の観音寺というところの離れを安置所に手配してくれていて、そこで納棺、通夜、お別れ会という手順になった。「親しい友人があれば、是非とも呼ばれたらいいのですが、最後なのですから」との糸田氏の数度の勧めで、遅れて着いた姪の協力を得て、純のラインの交信歴から三人を選び、来て貰つた。

婚活パーティーで、二か月前に知り合つたばかりという一人の女性は、部屋に入る前から大泣きで、全く話が出来ないほどだった。

「もう二度と、フジヤマには乗らないと、言っていました」彼女の話では、純が亡くなる前日の土曜日の二十五日、二

人で富士急ハイランドという遊園地に行き、園の売りである「絶叫マシン」に乗ったのだという。マシンは二人が目当てにしていた乗り物だったのだが、純は乗つてすぐに、フジヤマのギネス級という凄いスピードにショックを受け、降りた後も顔がひどく青ざめていたので、心配していたと言う。

「翌日曜日の朝早くに電話をしたんです。何度かけても出ないので、アパートを訪ねました。部屋に入つてみようと、大家さんに頼んでも鍵を開けてもらえないのです」

「初めて、日帰りで遊園地に行つたのです」

と、途切れ途切れの声で言い、涙を拭こうともしない。

二人目の男性の方は、「三日前に仕事の後カラオケに繰り出し、純はノリノリで五曲も歌つたんです。富士急は、この二月は寒いから感心しないなと言つたんですが、大丈夫だよとケロツとしていました」と、信じられないと口を嚙む。

もう一人の女性も純の寝顔を覗き込み、「どうしたの？何でこうなるの」と肩を落としてしまった。

糸田氏は、会社関係者との打合せにも加わつてくれ、供物香典は辞退したい、本当に気持のある人だけで見送つてほしいという私たちの希望の機微を、うまくまとめてくれた。純が土日返上で決算を済ませ、疲労困憊気味であったことは本人から聞いていたが、担当の仕事全体を把握出来、実行し、特に会社に入る英語の電話は全て捌き、人間関係にも満足しているということ、一か月前に上京し、神楽坂で食事を共

にした妻から聞いていたのだった。「会社でも、友人関係でも、癒やしの純と呼ばれているんだぜ」、と当人が照れ気味に語っていたということも。

長期に及んだ休日勤務などの代休措置命令を、土日を挟み、二月二十四日金曜日から二月二十七日月曜日まで受けていた。死亡日時は、休暇中の二月二十六日の日曜日早朝あたりであろう、という監察医の診断だった。

前日土曜日の二月二十五日は、富士急ハイランドから戻り、午後十一時半頃まで、友人とラインの交信をジョークを交えながら普通に行い、翌日曜日の朝に連絡がとれないため、問合せのラインや、メールや、不在着信の電話が五十件を越えていると、姪が教えてくれた。

ラインやメールの幾つかを見せてもらったが、日曜日にも、月曜日にも、その次の週末にも、翌月にも友だちと会う約束が出来ていた。最後のラインになる二月二十五日の土曜日午後十一時三十三分の文言は、「パンケーキ以外にも、フレンチトースト、エッグベネディクトもパフェも好きです。食べ物で、好き嫌いはないですよ！お寿司も中華も、タイ料理も好きですよー笑」となっている。

しかし、十一時三十九分の、相手からの次の問い掛けには答えていない。

「フレンチトーストとかも食べに出かけたりするんですか？食べることが大好きなんです」

相手は、まだ一度も会ったことがない女性らしい。近いうちに食事でもいかがですかという話が、まとまりつつあったようだ。

その二月二十五日の土曜日の昼頃には、福岡の小説道場の私の携帯に、入院中の母の怒りを帯びた声の電話が、妻を名指して掛かってきたのだ。日頃から痲癩癖があり、妻には手厳しい母であったから、何か特別の注文でもあったのか。叱責でもあったのか。

思い当たることが全くないではないが、それと純との関係がどこにあるのだろうか。

まさか、純の身に起きる何かを察知し、妻に伝えようとしたとか——。「そんなことなど、あり得ようもないな」と私は独りごちた。

化粧を担当する納棺師は、二十代かと思われる女性だった。軽く一礼をすると、純の顔にファンデーションを塗り、丁寧に延ばしていくうちに、純の表情が以前に増して若くなってきた。眉もわずかに引き、リップグロスも塗った。髪も拭き上げ、櫛の目を入れると、今にも何かをしゃべり出すのではないかとというふうな精気に満ちてきた。

「いかがでしょうか」と問うので、義妹が「前髪を少し垂らしてもらおうと、生前の純のとおりになりそうです」と言いながら、彼女の了解を得て、整い過ぎた前髪に少しだけ手櫛を

入れるといつもの純になった。

丁寧な白い装束を整えてもらい、合掌をした。妻が、アパートに掛かっていた中から選んできた、愛用のブレザーコートを胸に掛けてやると、純は一人、棺の中の人になった。

「まだ、三十八年と十六日なんです。一番若い純が、どうしてこんな姿になつてしまうの」

妻が、涙に噎んでいる。棺の窓は開けられており、純の口元はもの言いたげである。どういう角度から眺めても、微笑みを浮かべているとしかみえない。

「冗談だよって、今にも喋り出すんじゃないかと思えてならないわ」妻は、何度も何度も純の頬を撫で、額を撫でる。

「だって、つい一か月前、また次の美味しい店を探しておくからと約束して、別れたの。本当に、はちきれそうな笑顔でいっばいだったのよ」と誰に聞かせるともなく、呟く。

ピアノの講師をしている義妹は、私たちより一日遅れで、福岡から姪とともに駆け付けてくれたのだが、山崎まさよしのアルバムを持ってきてくれた。中でも純は、初期の作品である「ワンモアタイム・ワンモアチャンス」の切々と歌い上げるメロディが好きで、自身のカラオケのおはこでもあった。糸田氏が準備してくれたカセットデッキでアルバム曲を流すと、純を囲んだサロンみたいになった。

日情報システムから香山課長ほかの担当者が到着し、お別れ会その他の最終の打ち合わせになった。会社の主催にはし

たかないというふうに意思を伝えていたことを確認すると、「何か弊社に対し、希望されることがおありでしょうか」と打ち合わせを取り仕切る総務担当者が聞いてきた。

「あまり、会社の重大事にしてほしくないのです。供花とか、社長挨拶だとか、そういう形式的なものなしに、静かに送りたいのです」

会社に多くの責任があるのではないか、という言葉が幾度か喉元まで出掛かったが、それでは純の思いに添えそうになく、ことを荒立てても純が息を吹き返す術もない。幼時からまとめ役を務め、みんなに和んで貰うことがなよりの喜びだった。

学生時代は北欧音楽のサークルを立ち上げ、会社でも、「工夫・挑戦」ということを信条にしており、英語の電話を一手に捌き、仕事に自信を持ち始めた最近では、同僚や若手の相談や悩みを聞き、慰め役になっていたらしい。

打ち合わせでは、純と特に親しかった人に限って参列してもらい、小規模のお別れ会にしようということにしていたが、当日になると、予定の三倍になる七十人を越えた。

社長や重役の顔もあったが、「山が寒過ぎたのじゃないかしら」、「きつとまた一緒に仕事をしようね」、「本当にありがとうね」、「英語の電話ではいつも助けてくれたね」、「笑顔の純、好きだった」、「絶対、また会うからね」と棺に花を入れ、涙し、合掌の白い指を何度も撫でてくれるのは女性や若者たちだった。山崎まさよしの曲が切々と流れる

中、「東京が好きで、チャレンジすることが好きで、神楽坂が大好きだった純は、会社の皆様に大切にされ、こうして好きだった環境の中で、突然生を終えることになりました」と深く頭を下げた私の傍で、妻と義妹と姪が肩を震わせていた。

純は、幼い頃から、みんなに可愛がられてきた。今は亡い妻の父母たちは、どこに行くときでも純を抱いて出た。それは、ただ孫だからという可愛がりではなく、「純は、私たちに授けられた大切なもの」という表現を使うので、「あまり甘やかしてしまうと、困るのよ。それって、なにか意味があつてのこと」と、妻の方が閉口し、尋ねるほどだった。

純は繊細な質で、場の空気を読む勘が鋭く、近所でも、学校でも、純は困っている子を見ると放っていなかった。「定規を壊したんだけど、買ってもらえるかなあ」などと聞くので、妻が怪訝に思っていたところ、ずっと後の家庭訪問の際、担任から「純君は私の役割まで担ってくれます。Y君が定規を折って作図に困っているとき、ぼくの方は終わったから使つていいよ」と与えたのだという。

中学のときもそうだったが、高校の卒業式の後、担任からの言葉で「純、君はいつのときもみんなのアイドルだったな」と言われ、さかんに照れていたという。

渋谷の火葬場に同行したのは、私たち三人と、糸田氏だった。とうとう、ここまでできてしまったのだ、とさすがに胸が

重く、苦しくなった。

「多少我が儘には育ったけれど、いつも笑顔を絶やさないう子だったわ」

「多くの職場では、馴染めなくて泣き言ばかり言ってきたんじゃないかなあ」

「純には純の、理想があつたのだと思う。威張ったり、自慢したり、怒鳴ったりということのないところで働きたい、といつも言っていたわ。ただね、それは職場という場所では無理なのかもしれないよ、と宥めるのが私の役目だったの」

「純は、私がお菓子を少し分けてちょうだいと言つても、一度も拒まなかった。ちよつぱり、残念そうな顔はしてたけど五歳の頃かな」

義妹も、純を玩具みたいに扱っていた。

「純みたいな子が、これからだというときに突然死んでしまふなんて——。道理が判らない」

「いつも笑顔でいるんだよと言つた純に、もう一度会いたい。もう一度だけでいいから——」

妻は、東京にきて以来、殆ど食べ物を買っていない。ただ、震えが襲つてきて止まないのだから言う。

「これ見てちょうだい。最後の写真よ」

殆ど言葉を発せず、純の携帯を丹念に調べていた姪が、携帯の写真を向けてきた。

キリストの磔刑場面の、顔出し写真だった。胸に太い槍が

二本刺さっている。

「純の大学も学生寮も、教会の付属だったけど」

「磔刑の恰好じゃない？ 太い槍が二本も」

「でも、純は笑つてる——」

「土曜日の午後一時三分とあるわ」

「亡くなる前の日なのね——」

「満面の笑顔だわ——。それも、幼い頃の純の笑顔で——」

妻の声が濡れ、途切れ、荒い息になり、後は詰まった。

糸田氏も頭を垂れ、少し離れて立ち尽くしている。

私は唸つた。何故だか判らないが、「純にはきつと、これらのなりゆきが、以前からかすかに見えていたのかもしれない」という言葉がふいに湧き出した。

言葉はいつか純の口癖であつた「笑顔」に替わり、しばらくの間、宙を彷徨つていたが、くるりくるりと奇妙な弧や線をあちらこちらに描き、幾度もそれを繰り返した。やがて、「いつでも捜しているよ」、「命が繰り返すならば」と呟いた後、長い息を吐き、ふわりと私の胸に落ちてきた。

二月二十八日の朝、部屋に眩しく差し込んできた光。あれは、純の言葉だったのかもしれない。既に純の身体を離れた言葉が、顛末を知らない私たちの部屋に、淡い光の線となり、それを届けようとしていたのだったろうか。

(了)